

MIRAI

【人と防災未来センターニュース】

【人と防災未来センターニュース】

発行／阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター



Vol.

24

Contents

「ひょうご安全の日 1.17のつどい」開催/1.17防災未来賞	1
災害メモリアルKobe/防災EXPO	2
減災シンポジウムを開催	3
研究調査員紹介	4
企画展等	6
友の会	7
研修のご案内/企画展開催のご案内	8

「ひょうご安全の日 1.17のつどい」開催



今年も1月17日（木）「ひょうご安全の日 1・17のつどい」が開催されました。

正午に、神戸市立なぎさ小学校の児童が「カリオンの鐘」を

鳴らし、参列者が黙とうをしました。

「ひょうご安全の日推進県民会議」会長として井戸敏三兵庫県知事は「震災の経験と教訓を後世に受け継いでいくこと」の重要性を訴え、また、被災当時小学校一年生だった新成人の藤田和樹さん、坂田萌さんが「わたしたち一人一人が震災を忘れることなく、助け合って災害に強い社会を築くことが大切です。安全で安心な社会づくりに貢献していくことを、兵庫県民を代表し、成人を迎えたわたしたちのメッセージとします。」と「県民の言葉」を述べました。

（写真右）

この後、河田恵昭・県民会議企画委員長が『1・17ひょうご安全の日宣言』を発表し、最後に参列者で白いカーネーションを献花しました。



1.17ひょうご安全の日宣言

震災から13年が経った

私たちは多くの人たちに 震災の教訓を知ってもらいたいと願ってきた
しかも 世界の地震国の人々に早く伝えなかった
阪神・淡路大震災の教訓が 被害の軽減に役立ってほしいから

阪神・淡路大震災は 野島断層が起こした地震

しかし わかっている活断層だけが地震を起こすのではない
能登半島地震も新潟県中越沖地震も起こるまでわからなかった
活断層は どこにでもあると思わなければならない

地震が起こると今も多くの人が被災する
とくに高齢被災者が多くを占め すまいの再建も難渋する
被災地の復興にもっと力をそそがなければならない

私たちは地球激動時代に生きている

地震がいつ どこで起きても 被害が大きくならないようにしたい
それには震災の教訓を生かし それを災害文化に育てたい

誰でも地震に遭遇する

被害に遭わないように普段の生活の知恵を活用しよう
それを自分から 家庭から そして地域から発信したい

伝えよう もっと伝えよう阪神・淡路大震災の教訓を
活かそう もっと活かそう阪神・淡路大震災の教訓を
震災の教訓は 私たちの貴重な財産なのだから

2008年1月17日

ひょうご安全の日推進県民会議

1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」福島県立双葉高校がグランプリ

全国の学校や地域で防災教育・防災活動に取り組んでいる児童・生徒、学生を顕彰する1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」の表彰式と発表会（（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構、兵庫県、毎日新聞社主催、選考委員長・河田恵昭人と防災未来センター長）が、1月13日（日）に神戸市中央区の兵庫県公館で開催されました。

同賞は、阪神・淡路大震災10年を機に平成16年度にスタートし、今回で4回目を迎えました。小学生、中学生、高校生、大学生の4部門に30都道府県と海外から計123校・グループの応募がありました。今年度から、大災害の被災地で被災の経験と教訓から生まれた活動を

対象にした「はばタン賞」と、過去の大賞団体が継続的に取り組んでいる特にすぐれた活動に贈る「選考委員特別賞」が新設されました。

その中から「ぼうさい大賞・グランプリ」に選ばれたのは福島県立双葉高校で、寝たきり高齢者の床ずれ予防に役立つ「ゆりかごベッド」の開発など、災害弱者といわれる地域の高齢者救援のための活動が高く評価されました。

防災未来賞事業は、防災教育普及のために来年度以降も引き続き実施され、6月から9月にかけて募集が行われる予定です。

受賞校・受賞グループは3ページに記載のとおりです。

災害メモリアルKobe2008 ～次世代に教訓を語り継ぐ会～ 開催

1月13日(日)、人と防災未来センターにおいて次世代の育成、世代間交流による語り継ぎ、地域間交流などを行うことによって、「市民の防災力を高める」ことを目的に「災害メモリアルKobe2008」を開催しました。

阪神・淡路大震災後10年間、「安全・安心でこころ豊かな社会づくり」を目的に開催されてきたメモリアルコンファレンス・イン・神戸の精神を受け継いで開催してきたイベントで、今年で3回目となります。

今回のプログラムでは、神戸市立西郷小学校・淡路市立岩屋中学校で事前に行った、小・中学生のときに阪神・淡路大震災を体験した先輩たちによる特別授業をもとに、その感想を作文に書いていただき、その中からそれぞれ6人の児童・生徒たちが作文を発表しました。

その間、途中休憩を利用して、六甲アイランド幼稚園の園



小学生による作文発表



パネルディスカッションの様子

児の皆さんと兵庫県のマスコット「はばタン」が、身体を使って覚えられる親しみやすい防災の取り組み「み～んなおいで 元気な子！QQ体操」を披露。会場の参加者も一緒になって体を動かしました。

また、午後からのプログラムでは、能登半島地震を経験した石川県の輪島市立門前中学校、中越沖地震を経験した新潟県の県立柏崎総合高等学校からそれぞれの生徒さんをお招きして、地震の体験やその後の地域での活動について、発表をしていただきました。

次に、実行委員メンバーである神戸学院大学 防災・社会貢献ユニットの船木伸江氏をコーディネーターに、特別授業を行った先輩、作文発表した生徒さん、震災体験を発表した生徒さんによるパネルディスカッションを行い、震災の体験や語り継ぎをもとに、ボランティア活動や体験の発信といったチャレンジを行うに至ったきっかけなどについて、意見交換を行いました。

最後に、実行委員長の京都大学林春男教授が、「語り継ぎとは容易なものではない。

人間の脳の奥深くにある記憶をいかに呼び覚まし、市民全体が、将来、来るべき大災害に備えて、考え、行動するかが大事である。」と締めくくりました。



元気いっぱいQQ体操を踊る園児とはばタン

HAT神戸+防災EXPO 2008 開催

1月9日から20日の約2週間、HAT神戸に並ぶ4つの機関＝人と防災未来センターおよび、JICA兵庫、兵庫県国際交流協会、兵庫県立美術館が共同主催および会場となって、表題の複合的防災イベントが行なわれました。各施設では会期を通じての展示型企画を行いながら、週末には、昨今全国的に話題となっている「イザ！カエルキャラバン！(かえっこバザール)」をはじめ、「サバイバルクッキング教室」、「シェルターフェスティバル」、「阪神・淡路大震災の手記変換プロジェクトの最新作のライブ上演」など、盛りだくさんのイベントが行なわれ、近隣の親子連れ等が多数訪れ、HAT神戸一帯が防災を遊びながら学ぶ姿にぎわいました。

今回、JICA兵庫内に、「兵庫県国際防災研修センター」が開所したことにちなみ、こちらからの呼びかけで4施設が共同し、「国際」と「防災」そして「アート」の3つのキーワードを軸に実施した初の防災イベントとなりましたが、HAT神戸全体が協力しあい、発生から13年を経過した阪神・淡路大震災の学びを、震災の後に生まれた若い世代にどのように伝えていくのかという課題に対して、前

向きな具体的実践を提示することに努めることができました。共同主催者として企画し、またその蓄積されたスキルを惜しみなく発揮したNPO法人プラス・アーツによって、彼らが提



坂本廣子先生によるサバイバルクッキング教室

唱する「防災の日常化」のコンセプトで、親しみながら遊ぶ中で自然に防災スキルを身に付けることのできるコンテンツ群を、この地で実践する貴重な機会に恵まれました。

この度の取り組みの成果を活かし、これからも、まずは地域近隣の若い世代に対する効果的な防災総合学習の場として、HAT神戸施設群が有効に機能していくことができれば、この地に集積する諸機関の高い存在意義を確認・実証していけるものと思われま

す。なお、人と防災未来センターでは『世界の防災グッズ』をテーマにした企画展示の開催をもって、この防災EXPOへの参画コンテンツとしましたが、この企画展は5月11日まで引き続き開催していますので、是非足をお運び下さい。



イザ！カエルキャラバン！で、遊びの感覚を取り入れた防災訓練に参加する子どもたち



かえっこバザール：おもちゃのオークションで盛り上がる子どもたち

減災シンポジウムを開催—大規模地震に対する危機管理について幅広く議論



阪神・淡路大震災の経験と教訓を踏まえ、大規模な自然災害から被害をできるだけ少なくする「減災」について考えるシンポジウムを1月11日（金）にHAT神戸のひょうご国際プラザで開催しました。

2回目となる今年度は、「地震多発時代における国と地方の防災連携を考える —災害対策についての危機管理体制は十分か—」をテーマに、行政関係者や防災関係者を中心に約250人が参加し、パネリスト等の発言に熱心に耳を傾けました。

シンポジウムには、（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構の林敏彦安全安心社会研究所長をコーディネーターに、同機構研究調査本部長の五百旗頭真防衛大学校長、危機管理総合研究所の小川和久所長、富士常葉大学環境防災学部長の小川雄二郎教授、国土交通省近畿地方整備局の布村明彦局長が出席しました。

まず小川和久氏が、災害に対する危機管理体制の現状について課題提起を行いました。小川和久氏は、日本の危機管理は形式に流れており、実際に機能するかどうかのチェックが行われていないと指摘。国の安全を守るためには自衛隊や危機管理庁の二本柱と、さらに、それを統合する司令塔として国家安全保障会議のようなものが必要と訴えました。

こうした指摘を受け、五百旗頭氏からは、阪神・淡路大震災以降、自衛隊では災害の規模に応じた支援体制のマニュアル化を進めているが、大規模な被害が予想される南海・東海地震などが来れば、自衛隊だけでは対応できない。民間の協力、連携が大事である。自治体や防災関係機関で、こうした事態に備えて本物の対応能力を鍛える必要がある。そのために専門家を育成し、本気の訓練が必要だと述べました。

また、内閣府の地震・火山対策担当参事官も務めたことのある布村明彦氏からは、内閣府の防災部門や内閣官房の危機管理部門など横の連携が図られてきており、応援協定なども結ばれているがルールづくりはあまりできていない。それぞれの役割を整理して訓練し

ておくべきである。大規模な災害時にどう応援していくのか、ネットワークを組んでおく必要があると主張しました。

さらに、小川和久氏は震災の教訓を受けて緊急消防援助隊などが整備されたが、それがどのように機能するのか実動訓練をしてチェックしておく必要がある。また、ブロックごとに災害の専門家集団を常に維持し、教育訓練を行うことで情報共有ができ、政府のシステムと密接に協力し合いながらレベルを高めあっていくことが大事だと力説しました。

小川雄二郎氏からは、インドネシアのスマトラ沖地震を例にあげ、はじめは国の組織が復興にあたり、その後、地元自治体がそれを引き継ぐこととなっていたが、うまく計画どおりにできていない。地方が引き継ぐときの人材育成をどうするのかといった問題が起きている。HAT神戸に集積している防災関係機関がそうしたことにについて支援していくことが求められているとの意見が出されました。



1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」受賞校・受賞グループ

《ぼうさい大賞》

高校生(グランプリ)=福島県立双葉高校
小学生 山口県水の自遊人しんすいせんたいアカザ隊
中学生 新潟県長岡市立太田中学校
大学生 和歌山大学経済学部中村ゼミナール

《優秀賞》

小学生 岩手県宮古市立鉄ヶ崎小学校
中学生 神奈川県三浦市立初声中学校
高校生 東京都立三宅高校
石川県立穴水高校
大学生 該当なし

《奨励賞》

小学生 愛知県名古屋市長柳小学校
大阪府東大阪市立高井田西小学校
兵庫県神戸市立本山第二小学校
中学生 東京都世田谷区立太子堂中学校
新潟県双子胡瓜
徳島県徳島市津田中学校
高校生 石川県立門前高校
愛知県高校生防災お助け隊
大学生 東京都国際ボランティア学生協会
京都府立命館大学国際協力学生実行委員会
中越・K O B E 足湯隊



グランプリに輝いた
福島県立双葉高校の
床ずれ防止ベッド

《希望賞》

兵庫県アトリエ太陽の子
徳島県美波町立日和佐小学校
兵庫県神戸市立太田中学校
高知県立高知東高校
宮城県東北福祉大学学生ボランティアサークル「Withボランティア」

《選考委員特別賞》

兵庫県立舞子高校

《はばタン賞》

新潟県小千谷市立小千谷小学校
新潟県長岡市立山古志小・中学校
新潟県立柏崎総合高校
兵庫県明石工業高等専門学校建築学科

人と防災未来センター 研究調査員紹介



研究調査員 堀井 宏悦

読売新聞大阪本社編集委員

昨年7月にセンターに派遣され、研究部の一員として、防災の研究・調査に取り組み始めて8か月が過ぎました。新聞記者になって26年、事件・事故や地方行政、そして教育問題を長く取材してきましたが、研究・調査という未知の世界に足を踏み入れ、今も戸惑いながら、自らに課されたテーマ「防災に貢献する報道のあるべき姿」を探す日々が続いています。

防災関係の書籍を何冊も買い、様々な研究論文にも目を通してみる。そんな試行錯誤が続いた8か月を振り返ると、神戸のこのセンターでなければ出来なかっただろうという経験を、いくつもさせてもらったことに気づきます。

新潟県中越沖地震が発生したのが、派遣されて2週間が過ぎたばかりの7月16日。現地調査団の一員に加えてもらって新潟に向かったのが翌17日でした。早朝の飛行機で新潟市に入り、県庁で情報収集した後、すぐに車で被災地・柏崎市へ。そして、歩きに歩きました。

「古い家、増築して複雑な構造になった住宅が、狙われたように倒壊している」。国内はもとより、世界の被災地を、その目で調査されてこられた河田恵昭センター長の被災地での指摘に、住宅の耐震性の向上がいかに重要かを肌で実感することが出来ました。

昨年10月から11月にかけて行われた災害対策専門研修に自治体の職員の方々と一緒に参加させてもらったのも貴重な体験でした。能登半島地震や中越沖地震の現場体験を踏まえた最先端の研究結果に基づいた講義に学ぶ一方で、神戸の街を専門家と一緒に歩かせてもらった経験が、今後の調査や取材に生きていると思っています。「被災体験を生かした復興が必要なんです」。様々な防災機能を備える形で、復興後に出来た公園内で聞いた地元の人たちの言葉が、今も耳に残っています。



中越沖地震の被災地では、古い家、増築などでバランスが悪くなった家屋が狙われたように倒壊していた(2007年7月17日午後、柏崎市の中心街で)

そして、阪神・淡路大震災の経験と教訓を伝えるセンターの展示からも多くを学びました。しかも、その展示が、運営ボランティアの方々の努力に支えられながら、訪れる人たちに多くのメッセージを発信し続けていることに深い感銘を受けました。

阪神・淡路大震災以降、被災地・神戸から全国に広がり始めた防災教育についての研究・調査をいま、私は始めています。今世紀前半には、東海・東南海・南海地震とそれに伴う大津波の発生が懸念され、首都直下地震の発生も高い確率で予測されるなか、次世代に防災の大切さ、そして「減災」のための知識や手だてをどう伝えるかが、社会全体の大きな課題になっています。ただ、昨今の「ゆとり教育」の見直し論議を受けて、小・中学校では、今後、時間割の過密化も予想され、その重要性を認識しながらも、新たに防災教育に取り組むことへの心理的な抵抗が教育現場には根強いようです。

「防災教育を実施していく際の課題は何ですか?」。昨年暮れ、全国の47都道府県と17政令市の教育委員会にアンケート調査を実施したところ、最も多かったのが「授業時間が足りない」(38% 24教委)。以下、「学習指導要領に明確に位置づけられていない」(22% 14教委)、「指導出来る先生がいない」(16% 10教委)……。

4割近い教育委員会が指摘するように、現在の学校現場は確かに「時間が足りない」に違いないでしょう。

しかし、東海・東南海・南海地震が起されば、国家予算に匹敵する経済被害が予測され、2万人を大きく上回る人たちが亡くなる恐れがあるとされています。阪神・淡路大震災をもたらしたマグニチュード7.3の直下型地震から13年を迎える前日の、今年1月16日の読売朝刊で、センターの上級研究員で京都大学防災研究所の林春男教授は「この『国難』を乗り切る際の主役は、いま学校で学んでいる子供たちだ。阪神大震災から13年が過ぎ、中心となって乗り切った主役たちが、もうすぐ現役を去る。この人たちの体験が行政など組織できちんと語り継がれているだろうか。教育を通じて組織の『知』として広く社会に定着させていく必要がある」と語って下さいました。

次世代に語り継ぎ、伝え残していくための手だてを、センターで日々繰り広げられている活動、そして神戸をはじめ被災地で続けられている努力などから学び、「防災教育の課題と可能性」といった形で、研究成果や記事としてまとめることが出来ればと思っています。

読売では2005年以降、毎年1人ずつ記者をセンターの研究調査員として受け入れてもらってきましたが、前任の2人が阪神・淡路大震災の取材経験もある地元・大阪本社の出身記者なのに対し、私は、入社以来、センターに派遣される直前まで、東京本社に勤務してきました。神戸で学んだ多くのことを、東京、そして東日本に積極的に発信していきたいと思っています。



研究調査員 水 中 進 一

鳥 取 県 職 員

鳥取県の防災に関するミッションは、自然災害をはじめとするあらゆる危機から県民の生命・身体・財産を守ることです。全县を挙げてこのミッション達成に取り組んでいます。この一環として、平成19年4月から1年間の予定で鳥取県から人と防災未来センターの研究部に「研究調査員」として派遣されています。これまでは、阪神・淡路大震災（平成7年1月）での災害派遣、林業（治山・砂防）技師として鳥取県西部地震（平成12年10月）等の山地災害の復旧・予防業務及び県の防災局勤務を経験しました。今回の研究分野は初めてであり、また自治体からの派遣は初めてであり、毎日が手探りの状態でした。個人的には、阪神・淡路大震災の災害派遣に従事してから実に12年ぶりの神戸、さらにそのメモリアル施設で勤務出来ることに大変に感慨深いものがあります。

現在は、センターの研究員の方の指導と助言を受け、県の課題に関する研究やセンターのプロジェクト研究などに参加させていただいています。以下に、現在取り組んでいるテーマの一部を紹介します。

1つ目は、「自治体の災害対処能力向上のための教育訓練について」です。災害時に司令塔となるべき自治体の「防災に関する高度な専門的知識・技術的能力」をいかにして高めるかについて、ある県の1年間の業務分析と自衛隊などの危機管理を専門とする組織へのヒアリングを行い、教育訓練をキーワードとして検討し、訓練管理の概念の導入の必要性を検討しています。成果の一部は、センターの研究員の方と共同発表しました。

2つ目は、センターの中核的研究プロジェクトの一部として、実際に災害対処を経験した災害対策本部の運営の実態について調べています。いくつかの自治体等のヒアリングを行いました。やはり、平時の組織である自治体にとっては、普段行っていない特殊な業務についての負担が大きく、実際の活動場面では、災害対応の経験が重要であることが解りました。防災分野では、未だ経験を積む方法が確立されておらず、災害を経験した職員のノウハウは暗黙知となったまま埋もれていく事例が多いようです。今後は、これらの暗黙知を形式知に変換して職員間（自治体間）で共有する方法、効率的な訓練方法、災害対処を体験できる方法等について検討が望まれます。

3つ目は、自衛隊の災害派遣に関する問題です。災害派遣は、災害規模が自治体の能力を超えるか、あるいは超えると予想されるなど必要な場合に、都道府県知事等が自衛隊に要請し、「公共性」「緊急性」「非代替性」の原則に照らし合わせて派遣が判断されます。しかしながら、近年、災害派遣は時代の変化と共に質的变化を遂げています。例えば、新潟県中越沖地震（平成19年7月）では、生活支援が早い段階から大規模に実施されました。自治体及び自衛隊へのヒアリング調査を行い、災害派遣の実態について調査しています。特に、災害派遣の費用負担は、従来と同じく、救援に必要な経費（炊出しの食材費など）は基本的に自治体の負担であり、自衛隊（隊員）の維持等に必要経費は自衛隊の負担であることも確認できました。初動から効果的な災害派遣を期待するためには、災害派遣の法的・

能力的な限界の理解及び経費負担の協定を平素から締結することを含めた、自治体と自衛隊との相互理解と信頼に基づく、平時からのパートナーシップの構築が必要だと考えます。一方で、災害派遣は自衛隊という巨大な組織力を生かした支援であることから、その実行力と影響力は他組織の比ではありません。自治体が自衛隊に過大な支援要請を行った場合は、炊出しなどの生活支援が過度になる可能性があることも理解しておく必要があります。成果の一部である自衛隊が行う応急給水活動については、センターの研究員の方と共同発表を予定しています。

その他にも、「災害現場における現地調整所の運営」「防災における技術者の役割と自治体との連携」等についても調査を行っています。

このように、現地調査への参加、資料の調査、共同研究、専門外の分野との交流、センターの研修・イベント業務への企画段階からの参加、多くの人との出会いなど、行政職員では得られない経験をしています。また、センターは、神戸の人々のセンターに対する思いを感じたり、多くの情報が集まるなど、他では得難い場所です。慣れない研究生活ですが、センターの方々、そして神戸の方々のおかげで充実した時間を過ごしています。ここでの経験は、個人にとっても鳥取県にとっても大変大きな財産になるだろうと思います。引き続き、全国の自治体から研究調査員が派遣されることを願ってやみません。派遣終了後は、鳥取県に復帰しますが、ここで得た知識や経験とともに培ったネットワークを鳥取県の防災力の向上と減災文化の醸成に繋げていければと考えています。

最後になりましたが、センターで勉強する機会を与えていただいた兵庫県、暖かく迎え入れてくれたセンターの方々、そして阪神・淡路大震災を経験された神戸の皆様に感謝いたします。



陸上自衛隊の1t水タンクトレーラ。新潟県中越沖地震では、延べ6,505両が応急給水活動に使われた。

■ 防災未来館企画展 「1・17の絆 防災のこころを伝える絵手紙展」



阪神・淡路大震災から13年。これまでに学んだ教訓を風化させず、次世代に語り継いでいきたいという願いをこめて描かれた「防災の絵手紙作品」を集め、1月9日（水）から1月27日（日）まで展示しました。

「防災・減災」、「自助・共助の大切さ」、「命の尊さ」等について想いを巡らし、「非常持ち出し品」などをモチーフに、大切な人にあてて描いた絵手紙作品約300枚は、展示期間終了後、郵便はがきとして投函され、それぞれを描いた方が宛てた相手に届けられました。参加者には海外諸国からの留学生も多数おり、1・17の絆が日本国内はもとより世界各地へと広がりました。

■ 防災未来館 リニューアル記念イベント「朗読でつづる神戸からの声2008“命つないで”」



震災の極限状況のおり、人と人とのつながりの大切さ、命の尊さを学びました。震災当時から13年が経つ今日に至るまで、このような体験や教訓を伝える数々の手記やこれらの体験・教訓を基にした文学が著されています。こうした大切な記憶・記録を朗読を通して伝えるイベントを、1月14日（月・祝）開催しました。

映像や音楽も交えながら被災者などの13のメッセージが朗読され、100人の参加者の中には、涙ぐむ人もいっしょに、共に生きてきた感謝の思いを共有することができたイベントでした。

「震災映像資料の上映会」を開催

1月12日（土）に「震災映像資料の上映会」を防災未来館5階で開催しました。

上映作品は、兵庫県南部地震発生最初の3日間（1995（平成7）年1月17日（火）～19日（木））の様子を当センターにおける研修用に約30分に編集した映像です。上映は2回行い、両回とも多くの方に御参加をいただき、上映を行った部屋が満杯になりました。上映終了後のアンケートでは、「参加できてよかった。」というご感想を多くいただきました。

震災13周年を迎えて、改めて防災の重要性や命の尊さ、共に生きることの大切さなどを考えるきっかけになるよう、今後もこのような企画を実施していきたいと考えています。



怖いものとして、昔から「地震・カミナリ・火事・おやじ」と言いますが、どれが一番怖いのですか。

防災 Q & A



「怖さ」の定義にもよりますが、一般的には「発生した場合の被害の大きさ」、「発生する確率の高さ」の2つがポイントだと考えられます。ここでは、「1年当たりの死者数」を指標に用いてリスクを評価してみます。

また「おやじ」については、台風・風水害を表す「おおよまじ（大山嵐）」という言葉が変化したものという説もあるようですので、風水害についても対象とします。

◎ 地震・カミナリ・火事・おやじのリスク

災害名	1年当たり死者数	備 考
地 震	649名／年	阪神・淡路大震災の死者が大部分であり、阪神・淡路を除くと6.2名／年となる。※
落 雷	4名／年	昭和40～50年代に比べると、近年被害は減少。※
火 事	2,067名／年	平成18年値（消防庁報道資料）
風水害	69名／年	過去には、5千人以上の犠牲者を出した伊勢湾台風のような事例もある。※
親 父	おそらくゼロ	（正確なデータ無し）

※ 警察白書掲載の平成7年～16年の死者・行方不明者から10年間の平均値を計算。

この結果をみると、日常生活のリスクとして怖いのは火事であり、次いで地震、風水害となります。

ただし、地震は「滅多に発生しないが、発生したら被害が大きい」災害であり、一方、親父は「頻繁に怒られるが、死ぬことはない」ものなので、「怖さ」の性質が大きく異なっていることには留意が必要です。

落雷や親父など身近な事象は怖さをイメージしやすいのですが、大地震・大水害など滅多にない災害については経験を蓄積することが困難です。防災学習を通じて日頃から正しい対策を学んでおきましょう。また地震対策だけでなく、火災報知器の設置（2006年より消防法の改正で義務化）など火災対策も大切です。

（人と防災未来センター研究員 紅谷昇平）

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター友の会

友の会会員（株）神戸製鋼所様の活動紹介

神戸製鋼所とグループ会社が 「コベルコ1.17ウォーク（通勤経路確認訓練）」を開催

ここでは、人と防災未来センター友の会法人会員の（株）神戸製鋼所様の防災に関する取り組みをご紹介します。

神戸製鋼所（神戸市中央区）とそのグループ会社約20社は、地震の発生を想定し、通勤時の安全確認や経路の確認を目的とした「コベルコ1.17ウォーク（通勤経路確認訓練）」を1月26日に開催しました。昨年2月に「通勤経路確認訓練」としてはじまったイベントが、今年は「コベルコ1.17ウォーク」と名前を変え、神戸本社地区のグループ会社従業員とその家族を対象として、「地震により普段使っている公共交通機関が不通※となり、徒歩での出退勤を余儀なくされた」との想定で、不通区間内の方は自宅から、不通区間外の方は指定された駅から、それぞれウォーキングをスタート。地図とともに参加者に配布された記録表には、「危険に感じた箇所」や「把握しておけば災害時に有効だと思えたもの」を記入する欄もあり、今回の経験がいざというときに役立つ内容となっています。

当日は200人を超える参加申し込みがあり、冬空のもと、最大で13km、4時間のウォーキングを終えた参加者は11時すぎからゴール地点となったHAT神戸「なぎさ公園」に集まってきました。炊き出しとして準備されたうどんやおにぎりも好評で、「思ったより短時間で歩き切れてよかった」「震災体験も風化さ

せないためにも年に一度は歩きたい」など、感想もさまざま。中には神戸市のホームページを参考に区間内の避難所を確認しながら歩いた人もいたようです。希望者は近隣にある「人と防災未来センター」も見学でき、家族そろって防災意識を高めるよい機会となりました。



* 想定不通区間

- <JR> 須磨～西ノ宮
- <阪神・山陽・阪急> 山陽須磨～西宮（阪急は西宮北口）
- <神戸市地下鉄> 板宿～三宮・新神戸
- <神戸電鉄> 長田～新開地
- <北神急行> 谷上～新神戸

（神戸製鋼所 業務部・秘書広報部）

「炊き出し大会」開催



友の会では、1月13日（日）、災害メモリアルKOB E開催にあわせ、「炊き出し大会」を開催しました。

「非常食を食べてみよう」「あの日を忘れない」をテーマに、友の会会員と兵庫県立舞子高等学校環境防災科の生徒さんたちで運営を行いました。スタッフには炊き出しの経験者が一人もおらず、当日の天気も心配されるなど、不安もありました。しかし、冷え込みが厳しい中、配膳開始時刻には行列ができる（写真下）など、お子様からお年寄りまで多くの方に御参加をいただき、開始から1時間半後には完食、無事終わることができました。

= 豚汁500人前の材料

豚コマ肉	20kg
大根	20kg
人参	10kg
葱	5kg
牛蒡	10kg
板蕎麦	12.5kg
しめじ	25パック
味噌	20kg
* 出汁入りのものを使用	
本みりん	適量
醤油	適量
七味唐辛子	好み
水	90L



<メニュー>

山菜おこわ 250食 五目ご飯 250食
豚汁 500食

「友の会」会員募集中

人と防災未来センター友の会は、センターの活動に協力し、積極的に利用して防災対策の大切さといのちの尊さを学習しようとする人々の親睦を深め、センターと連携しつつ、社会の防災力の向上に寄与することを目的に設立されました。どなたでも入会できますので、たくさんの方の入会をお待ちしています！

会員特典

1. センターへ無料で入館できます。
2. センターの最新情報が手に入ります。
3. 友の会のイベントに参加できます。

年会費

個人会員 3,000円
法人会員 一口 50,000円
郵便振替：00940-2-160211
口座名：阪神・淡路大震災記念
人と防災未来センター友の会



平成20年度災害対策専門研修について

人と防災未来センターでは、地方自治体の防災担当職員などを対象とした「災害対策専門研修」を平成14年度から実施しています。

現在までの受講者は1,600人を超え、また毎回募集定員を上回る応募をいただくなど、全国の自治体の皆様をはじめ、高い評価をいただいています。

本研修は、阪神・淡路大震災を含めた全ての自然災害の経験や教訓、当センターを含めた研究機関の知見や知識などを基に「今後起こるべき自然災害に向けた実践的な研修」を実施し、全国自治体の災害対応能力の向上を目指しています。

平成20年度も引き続き「マネジメントコース」をはじめテーマや目的を絞った特設コースなどを実施していきます。

災害対策専門研修 マネジメントコース「春期」

ベーシック	平成20年6月 2日(月)～6月 6日(金)
エキスパートA	平成20年6月 9日(月)～6月13日(金)
エキスパートB	平成20年6月16日(月)～6月20日(金)

災害対策専門研修 マネジメントコース「秋期」

ベーシック	平成20年10月 6日(月)～10月10日(金)
エキスパートA	平成20年10月20日(月)～10月24日(金)
エキスパートB	平成20年10月27日(月)～10月31日(金)
アドバンスト	平成20年11月 4日(月)～11月 5日(火)

※その他特設コースなどの日程については、
確定次第、ホームページ (<http://www.dri.ne.jp>)
に掲載予定です。

ワークショップ風景



企画展開催のご案内

■ひと未来館企画展「なつかし? あたらし? 手作りおもちゃ」開催中



なつかしい、でも、楽しさは新鮮な「手作りおもちゃ」を展示紹介し、魅力を再発見していただける企画展を3月16日(日)まで開催しています。身近にある素材で、誰でも簡単に作れる、面白いおもちゃが集合しています。ペットボトルのふたを使ったコマづくりに参加してくれた子どもたちは、「楽しかった! 家でも作りたい!」と、楽しそうに話してくれました。

お子さまだけでなく、大人の方も、子どもの頃に思い出して一緒に遊びましょう!

■防災未来館企画展「世界の防災グッズと防災の知恵」開催中

地震だけでなく「世界で発生する様々な自然災害」に目を向け、各地で発生している自然災害と、これに対する一般市民の備えといった観点から、「非常時の持ち出し品(エマージェンシー・キット)」等の防災グッズや、世界各地の「防災・減災への啓発のとりくみやアイデア」等について、5月11日(日)まで展示を行っています。

触って体験できる防災グッズもあります。世界ではどんな防災グッズがあるのか、日本と比較してみてください。



阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター機関誌「M i R A i」は、次号から財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構機関誌「hem21」と統合し、当センターの情報をはじめ、より幅広い情報を皆様にお届けいたします。

MIRAI

【人と防災未来センターニュース】Vol.24

発行/ 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター

お問い合わせ先

(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念

人と防災未来センター

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

総務課/ TEL.(078) 262-5060

観覧案内/ TEL.(078) 262-5050

ホームページアドレス/ <http://www.dri.ne.jp/>

●開館時間 9:30～17:30(入館は16:30まで)
ただし、7～9月は9:30～18:00
(入館は17:00まで)
金・土曜日は～19:00(入館は18:00まで)

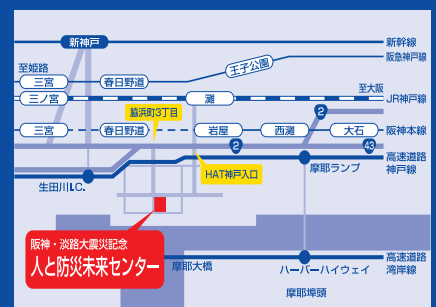
●休館日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌平日)
年末年始の12月31日と1月1日
※ゴールデンウィーク(4月28日～5月5日)期間中は無休

●入館料金(団体は20名以上)

区 分	防災未来館		ひと未来館		両館	
	個人	団体	個人	団体	個人	団体
大人	500円	400円	500円	400円	800円	640円
高校・大学生	400円	320円	400円	320円	640円	510円
小・中学生	250円	200円	250円	200円	400円	320円

※兵庫県内の小・中学生はココロカードを提示すれば無料。
障害をお持ちの方及び兵庫県内に住む65歳以上の方は上記の半額。障害者手帳又は年齢・住所のわかるものを提示ください。

交通マップ



■交通 鉄道/ 阪神「岩屋駅」から徒歩約10分・JR「灘駅」南口から徒歩約12分。
阪急「王子公園駅」西口から徒歩約20分。
バス/ JR・阪神・阪急・神戸市営地下鉄「三宮駅」から約15分。
神戸市営バス 三宮駅前から約1時間間隔で運転。
阪神電鉄バス 三宮前から約30分間隔で運転。
車 / 阪神高速神戸線「生田川ランプ」から約8分、阪神高速神戸線「摩耶ランプ」から約4分、阪急・阪神・JR「三宮駅」から約10分。

■駐車場 有料駐車場(普通車100台駐車可能)のほか近隣にも有料駐車場があります。

■バス待機所 予約制/無料
観覧予約時に待機所利用のご予約をお願いします。

ご意見・ご感想は事務局まで。

平成20年3月発行